

---

# メダロット +

メダロッター R y u

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

メダロット+

### 【Zコード】

Z5842Y

### 【作者名】

メダロッターリyu

### 【あらすじ】

メダロットより約三年・・・

これは一人の少年とメダロットの出会いから始まり数々の仲間、ライバル、そして「トモダチ」との出会い、戦いを繰り広げる少年少女、メダロットたちの物語・・・

そして未来の少年たちへつなぐ物語もある・・・。

## Memory Disc 0 プロローグ（前書き）

初めまして、Ryuです。

初めて書く小説ですが、それでも読んでくれると言つ人は読んでください。

では始まります、メダロット+の世界をお楽しみください。

では。

# Memory Disc 0 プロローグ

時は近未来・・・

世間では「メダロット」同士を戦わせる「ロボトル」という遊びが大流行していた。

ある年、「魔の十日間」と呼ばれる事件が起きた。

しかしその事件は一人の少年とメダロットによつて終演を迎えた・・

それから約三年、一人の少年と一人のメダロットの出会いから新たな物語が始まる・・・・・・・・・・・・

「・・・・・力・・・・ル  
「・・・・うーん  
「ヒ・・・・・・ル!  
「・・・・・・・・

「ヒカルつてば!」

「・・・・・」

僕は誰かに呼ばれ目を覚ました。

「・・・なんだ、キララが、おどかすなよ・・・。」

「おどかすなよ、じゃないわよ、小学校生活最後の夏休みが始まるつて言うのに居眠りしてるなんて信じられないわ。」

起きた途端にここまで言われるとは・・・・反論出来ないからしうがないが。

「まあいいわ、・・・・所でヒカル、あんたこのクラスの友達の事覚えたの?」

「・・・・三年の頃から一緒に人達しか・・・・」

「あんた・・・・」

僕の言葉にキララは怒った表情を見せたが、すぐに呆れた表情で僕を見た。

「・・・・じゃあ、せめてこのクラスで注目されている子ぐらい覚えておきなさい、いいわね、よく聞きなさい。」

キララがそう言つたので僕は話を聞くことにした。

「まず名前は「獅童　かい」、成績優秀で学年でもトップの学力ね、それで運動神経も抜群、これだけ聞けば完璧な人物だけど・・・・」

「致命的に口が悪い、のよね。」

キララが話していると、一人の女の子が話の間に入ってきた。

「イセキ。」

「で、なんであんた達あいつの話をしているの？」

「ヒカルがこのクラスの人のこと全然知らないって言つから離してた所なのよ。」

「ふうん、じゃあ続きをあたしが話すわ。」

するとイセキがキララに代わって話を始めた。

「セツキも言つたけれどあいつは口が悪いからね、まともに話もできないから友達ができないの、田付きも悪いからみんな恐がつて近寄らないしね……、話相手と言えばあたしうるくなもんよ。」

「……へえ、わかつたけど、なんでイセキがそうなこと知ってるんだ？」

「まあ、何て言つかあいつとは幼馴染みつてやつだからね、大体のことは知ってるわね……。」

「たまにはいいじゃないの。」

俺がそつぱつといせきは軽くながらして話しを続けた。

「まあ、やう言つ性格のせいで友達ができる強がつててさ、あれであこつたみじがり屋なのよね……。」

「おい。」

s.i.d.e -かい

イセキのやつが何か話してやがる・・・、ひつ、じりせまた有る」「ひみつまた有る」と無いこと吹き込んでやがるな・・・

「おー。」

「へつ？」

「てめえまた有る」と無いこと吹き込んでやがったな・・・

「や、そんなわけないでしょ、あたしがあんたの事を面白おかしく話して何の特にならぬって言つの?..」

「てめえは昔から事ある事にオレの事を変な風に他人に話してやがるだらうがー!..」

「(あー、やつぱりこいつめんどくさいわ・・・)」

「一人とも仲がいいわね。」

「「よくないー!ー!ー!」

オレがキララとか言ひやけりやつも同様に言葉を発した。

「真似すんなー。」

「あんた」いやー。」

「あー、あのやー。」

オレたちが言い合いを始めるとヒカルってやつが話しかけてきた。  
一体何のつもりだ・・・?

「かいくぐりでどんなメダロシトをもつてるの?」

「・・・ああ?」

「・・・どんなメダロシトもつてねのかなーつて。」

「・・・・・・・」

「わ、めんどくせえ、オレはメダロシトもつてねえんだよな・・・・・。  
。

「いこつメダロシトもつて無いのよ。」

あるヒイヤキのやつがオレがメダロシトをもつてこないことを嘲つた。  
・・・余計な事を言こやがつて、くせつー!

「・・・メダロシトなんてビンが面白こんだ・・・ー。」

そう言つてオレは自分の席に戻つた・・・。

「オレ、なんか悪い事を聞いたやつたかな・・・。」

「ああ、気にしなくていいわ、すねただけだから。」

「うん……」

(じょうがないわね……)

放課後・夜

かいの家

「メダロットか……」

(あいつ元気かな……)

「うひだよ、

ー！

『待つて下さい　どの、そんなに走ると危ないですよー。』

「わるいわるい、でもボクたまにしか  
ここあそびにいけないからうれしくてさ。」

『大丈夫ですよ、時間はたっぷりありますから。』

「うんー。」

「・・・・・いつの間にか寝ちまつてたのか、もう朝か・・・。」

「かい～～～ー。」

かると下から母さんの声がした。

「イセキちゃんがきてるわよ～～ー。」

イセキが・・・?、あいつ夏休み初日から何のようだ・・・?

「か～い～ーはやくおつてこないとかあせんなこちやうわ～ー。」

「今いくよー。」

母さんに泣かれるのは面倒だ、・・・しょうがない、行こう。

オレは階段を下りて玄関に向かつた。

「…何だよ。」

「わあ、出かけるわよー。」

「は？」

いきなり何言つてんだ、こいつ。

「メダラミナモウスヘリハ、アキハラニシテ」

「・・・なんでだよ、オレ別にメダロット興味ないし・・・。」

「今はそうかも知れないけど見学に行けば興味がわくかもしれないでしょ、それに」んな「可愛い女の子」からの誘いを断るって言うの?」

「アーツよ、かあさんむかづむかづだな。」

「……自分で可愛いって言つてゐる時点で可愛くねえよ。」

「なんか言つたかテメエ。」

「……いや何もいってねえ。」

「そう、なら早く行きましょ。」

•  
•  
•

オレは半ば強引に研究所につれて行かれた。

## メダロット研究所

「へえ、結構立派なんだな。」

メダロット研究所はオレが思っていたよりも立派だった。

「でも、入れるのか？」

「大丈夫よ、見学だけならタダだから。」

「そうか・・・」

そして俺たちは研究所の中に入った。

「まずは・・・展示されてるメダロットを見ましょー。」

「ああ・・・」

オレは言われるままにメダロットを見に行つた。

「・・・」

俺が思つていたよりもメダロットの種類はすげかつた。

「どう、すごいでしょ、でもまだこれで全部じや無いのよ。」

「 そ う な の か ！ ？ 」

「ええ、今のところ七十体以上の機体が出てるわ。」

「へえ、七十体か、すげえな・・・。」

「しばらく見ていたら?」、ちょっとある人に話つけてくるから。

「ああ。」

そう言つてイセキはどこかへ行つてしまつた。

言う通りしばらく眺めてるか・・・。

「DOG型シャンデック、こいつは射撃が得意なのか、CAT型マゼンタキヤット、たしかイセキが持つていたやつか、DGU型ドンドグーか、変な顔だな・・・」

いまいち興味をそそられるメダロットは見当たらなかつた。

「アーティストの心」

そんな時ふとオレの田にいたのは・・・

→ K W G 型 ． ． ． ヘッドシザース ． ． ． 。

オレの興味はそのメダロットに向いた、が、その時・・・。

「かい！」

「うわー。」

「博士に会って行くわよー。」

「…………こわなり声をかけんなよ、びっくりするだらうが…………。」

「ボーッとしてるあんたが悪いんでしょ。」

「これ以上なんか言つと聞こ合にならうが、黙つてた方が良さうだ。」

「…………」

「…………何黙つてんのよ、気持ち悪いわね、行くわよ。」

そしてオレたちのは博士のところに向かった。

「博士、連れて来ましたー！」

「おお、イセキ君、彼が獅童かい君か。」

そこには白衣とサングラスのじいさんだった。

「あんたがメダロット博士…………。」

「うむ、わしがアキハバラ アトム、メダロット博士じや。」

「どうせ…………。」

「……ヒカルキはメダロットに興味があるかね?」

博士は突然オレにそんな質問を投げかけてきた。

「…………はい!」

「つむ、ここ田じや、わしがメダロットについて教えてやろひ、と言いたことにもじやが・・・生憎忙しくての、代わりと行つては何じやがこれをやるひ。」

博士から渡されたのは名札だった。

「これは・・・?」

「入つてすぐ横に扉があつたじやる、そこにはわしの孫のナエがいるんじやが、やつはわしの次にメダロットに詳しいと行つても良いじやうひ。」

「つまりこれがあれば部屋に?」

「つむ、それじゃあ楽しんで来るが良い。」

「ありがとうございますー!」

オレといセキは博士の孫のところへ向かつた。

ウイーン・・・

「失礼します・・・。」

部屋に入ると長い黒髪の女の子がいた。

「あーり・・・?」

「久しぶりね、ナエちゃん。」

「イセキさん・・・どうもお久しぶりですー。」

「どうやら一人は知り合いみたいだ。」

「実はここあたしの幼馴染みなんだけビメダロシトの」とを教えてやって欲しいの。」

「はい、わかりました、えっと・・・」

「獅童かい、かいでいいよ・・・。」

「はい、よろしくお願ひします。」

・・・可愛いな、イセキとは大違いだ。

ガツ！

「つー?」

いきなりオレの足に激痛が走った。

「・・・なんかあんたいつもと態度違くない?」

「いのやめ・・・」

「…………」

「…………な、何？」

『気が付くとナーナちゃんが俺たちのことを見つめていた。

「おー入とも、仲がよろしくんですね。」

「「断じて良くない……。」「

「ふふ、それではメダロットについてでしたね、始めますけどいいですか？」

「待って、メダルとは何かってところから話してやつ。」

「は、はい。」

そしてナーナちゃんの説明が始まり、オレはしばらく真面目に聞いた。

「と云う事です、わかりましたか？」

「ああ、ちゃんと聞いていたから大丈夫だよ。」

「せうですか、よかったです……。」

「じゃ、そろそろ帰りましょうか。」

突然イセキがそう言つた。

「もうそんな時間か？」

「もうお昼だし、帰つた方がいいでしょ。」

「それもやうか・・・（また来ればいいしな・・・）。」

「オオ――ツン――！」

「な、なんだ！？」

「博士のいた部屋の方からよ。」

「おじこさまの！？」

突然ナ・ちゃんが走り出しだが、それをイセキが引き止めた。

「待ちなさい、一人じゃ危険よ、あたしも行くわ。」

「は、はい、わかりました！」

俺たちは一旦部屋から出た。

「一体何が起きているんだ・・・？」

しじりく走つてゐるとオレたちはとんでもない光景を目にした・・・。

「メダロットたちが、研究所を破壊しているーー？」

「これは急いだ方が良さそうね……、かい！あんたは部屋に戻つてなさい。」

「な、なんだと……！」

イセキの突然の言葉にオレは頭に来てしまった。

「ふざけんな！なんでオレだけ逃げなきゃなんねえんだ！？」

「あんた、メダロット持つてないでしょ？」

「つ・・・・！」

悔しかつたがオレは何も言い返せなかつた。  
紛れもない事実だからだ・・・・。

「・・・・・」

ダツ！

「・・・・『めんね、かい。』

しかしその時オレは知るよしもなかつた・・・、この後オレにひとつ運命を変える出会い、いや再会があることを・・・・。

M  
e  
m  
o  
r  
y  
  
D  
i  
s  
c

1に続く。  
・  
・  
・  
・

## Memory Disc 0 プロローグ（後書き）

お楽しみ頂けたでしょうか?  
次回から本格的に始まります。  
興味を持つて頂けた方はどうか  
ださい！  
ではまた！  
(ノシ)

## Memory Disc1

## 新生パソコン誕生～かいとロクシショウ（前書き）

今回はロボトルがあります。  
楽しんでください！

修正しました！

これで読みやすくなつたかと。

## Memory Disc1 新生コンビ誕生！かいとロクショウ

オレはイセキに言われた通りに部屋に向かって走り出した・・・。

くそつ！、オレにもメダロットさえあれば・・・。

オレの中でそんな感情が渦巻いた。

「・・・戻ってきたけれど・・・。」

もちろんやることなど何もない、オレは『』で指をくわえて見ている事しか出来ないのだ・・・。

『まだ、こんな所にも人間がいたか。』

「つー？」

『安心しろ、苦しみは一瞬で済ませてやる。』

突然声がして振り向くとそこにはKTN-OX、ア・ブラーーゲのページをつけたメダロットがいた。

あ、あいつまさかオレを殺そうとしてんのか・・・？  
い、いや大丈夫だ、メダロットは三原則がある、  
人間を傷つける事は・・・

オレがそう思った瞬間だった。

ザシユツ！

「…………？」、うわあ――――――！」

オレの腕には一本の切り傷が残っていた。

『まさか三原則があるから攻撃出来ないとでも思つたのか？、生憎俺はそんなくだらないモノからは解放されている・・・・！』

や、ヤバい・・・、想像していたよりも相当ヤバい・・・、オレは死ぬのか・・・？、嫌だオレはまだ死にたくない・・・・・！

『・・・・・われらの理想のために死ね。』

誰か、助けてくれ・・・・！

ガキイインッ！！

・・・あれ？、攻撃が止まつた・・・・？

オレが目を開くとそこには白いクワガタムシのメダロットがいた。

『ぬう・・・・！？』

『・・・・・大丈夫でござるか？』

「・・・・・ああ。」

オレは突然の事に驚いて状況を把握できなかつた。  
しかしこれだけはわかつていた。

こいつはオレの味方だと・・・・。

『拙者が奴を倒す、おぬしはそれまで動かない方がいい。』

そう言つとそいつはキツネ型に向かつて言つた。

『ふはははは、久しぶりに楽しめそうだ！』

『斬り捨て御免！』

キィーン！

二人の剣がぶつかりあい火花を散らす。

メダロッチが無いので正確にはわからないがまだ二人ともまだダメージは無いだろう。

『ふん見かけだけのクワガタでは無いようだな。』

『貴様こそ。』

二人の戦いはすごいものだつた。お互に一歩も引かない物凄い攻防だつた。

「すげえ・・・」

『ふ、クワガタムシ、オレの腕にばかり注意が向いてるんじゃないか？』

『なに？』

腕にばかり・・・？、あいつまさか！

「よけろー、ブレイク攻撃がくるー。」

『・・・・・』

『ミカヅチー！』

ブウウウン、ドオッ！

『はつー。』

ギリギリでクワガタはブレイクをかわした、よかつた役に立てたみたいだ。

『・・・助かった、少年。』

「ああ・・・、とこりで頼みがあるんだ。」

『なんでいざるか？』

「一緒に戦わせてくれ。」

『・・・・・、・・・解った共に戦おう。』

「ああー。」

オレはここのまま見ているだけなんて嫌だ、その気持ちがこの答えに導いた。

『指示は任せたでいざる。』

「アーティスト」

『ふん、人間が着いた位で調子に乗るな！』

『いくぞ！』

そう言うとクワガタはキツネに向かつて走りだした。

「チャバラソードで攻撃！」

はあつ！

ギイイイン!!

かわいいパンマーだ！」

15h = 1

一  
かわされたか！」

『な、なんだこいつらは……、せつまよりも動きが数段良くなっている……』

卷之三

どう来る……？

『ぐつ、つおお――――――』

突っ込んできた……！

「……いいか、恐らくこまやつは冷静さを失っている、だからやつの突っ込んできた勢いを利用して……。」

『……解ったで』ぞわるー』

・・・まだ、・・・・・まだだ、・・・・・・・・

「『いまだーー』」「

ズバアツ！！

あいつは突っ込んできたキツネをチャバラソードで返り討ちにした・・！

『ぐつ、バカなつ・・・、この俺がこれ程のダメージを・・・！？』

『・・・・・』

「やつた・・・！」

キツネは胸部に大きな傷がついていた、もう勝負はついたような物だろう。

『少年・・・。』

「ああ・・・。」

クワガタはオレに視線を向け何か同意を得るような顔をした。  
オレは何を言おうとしたのか大体わかったのでそのまま返事をした。

『拙者は争いは好み、このまま引き上げるがいい。』

『ぐつ貴様ら名は・・・・?』

『・・・口クショウだ。』

「獅童かいだ・・・!」

『貴様は・・・?』

『狐王丸だ、口クショウに獅童かい、覚えたぞ!、次に会つ時はこ  
う上手くはいかんぞ覚悟しろ!..』

そう言つと狐王丸と名乗ったメダロットは凄いスピードで去つて行  
つた。

「・・・・・はあ。」

長い緊張から解放されオレは安堵の溜め息をついた。

すると部屋に突然イセキたちが入ってきた。

「かい!」

「つおつー!」

イセキがいきなりオレの肩をつかみ安否を確認してきた。

「大丈夫！？、さつきあんたの叫び声が聞こえて、ケガとかは！？」

「大丈夫だよ・・・。」

「つて、ビニが大丈夫なのよー、腕ケガしてるじゃない！」

「だからこれくらい大丈夫だつて・・・。」

「そんなわけないでしょー、早く手当しないと！」

「帰つて自分でするからいって、少し切られた位だし・・・。」

「なによー、あんたあたしがどれだけ心配したと思つてんの！？」

「まあそれくらいにしてやりなさい、特に大きなケガでは無いのじやから。」

しばらくして博士が入つて来てイセキを宥めた。

・・・助かつたよ博士。

「どうやら間に合つたようじゃな、ロクショウ。」

「えつー?..」

オレは博士が突然そう言つた事に驚いた。  
博士とロクショウは知り合いだったのだ。

『ええ、言われた通り彼を助ける事は出来ました、ですが・・・』

「ケガをさせてしまつた事が……、かい君、君はまだついておる  
？」

「え……、オレはむしろ感謝しているよ、ロクシヨウが来てくれ  
なかつたら死んでたかもしないし……。」

「だそうじや、彼は氣にしておらん、それどころか感謝してあるん  
じや、やつ自分を責めるでない。」

『……わかりました。』

ロクシヨウがそつ言つと、博士がオレに話しかけて來た。

「実はのかい君、ロクシヨウは三年前にある事件を解決するのに手  
を貸したのじやがの……、その事件が原因でメダロットは登録制  
となり、多くの野良メダロットたちが居場所を失つた、無論ロクシ  
ヨウも例外ではなかつた、彼はほんの数カ月で多くの物を失つたん  
じやよ……。」

「そつだつたのか……。」

『……博士拙者はそろそろ。』

「ひむ……。』

「待てよー。」

『一・二。』

『気が付くとオレはロクショウを呼び止めていた。

「なあロクショウ、おまえ行くあてはあるのかよ？」

『とへりま・・・。』

「じゅあオレのところにこよ。」

『一・つ。』

オレの突然の言葉にロクショウは驚いた表情を見せた。

「（ほり・・・）の少年、ロクショウを誘うとは思い切った事をするわい。」

『・・・すまないがそれは出来ない。』

「じうじうだよ。」

『指者にはやりねばならぬ事がある。』

ロクショウがやつと博士が話に入ってきたとロクショウはいつになつた。

「まあ良二ではないのかロクショウ、しばしばは休んでも、おぬしは良くやさうとる、休暇をもらつたと思つての。」

『・・・解りました。』

やつとロクショウはオレの方を向き手を差し出しきつた。

『これから直しく頼むかいど。』

「・・・・・、ああ！」

こうしてオレとロクショウ、新たなコンビが誕生したのであった。

? ? ? side

『只今戻りました。』

「・・・・・」

『報告、メダロット研究所の襲撃失敗に終わりました・・・・・。』

「そう・・・・・。」

『申し訳有りません。』

『君ほどの実力がありながら失敗するなんて何があつたんだい？』

『実はある人間とメダロットに邪魔をされまして・・・・・。』

「…………へえ、君をそこまで追っこむほどのメダロットなのか。」

『いえ、それが……。』

「……？」

『そのメダロット、人間の指示を受けてから動きが突然良くなりまして。』

「……へえ、それでその一人の名前は？」

『えつ？』

「ちょっと興味が沸いたんだ、教えてよ。」

『は、はい、人間は獅童かい、メダロットはロクショウです。』

『ふふ、かいにロクショウか・・・、狐王丸、もつ下がつていいよ。』

『はつー。』

「それと、襲撃の軒だけど僕は怒っていないよ、襲撃の目的は僕たちの力を見せつける為だからね、それに僕はできる限りメダロットも人間も傷つけたくないからね・・・。」

『はつー！、有り難きお言葉！』

「これからもメダロットと人間の眞の理想郷をつくるため、宜しく

頼むよ。』

『はっ！、それでは失礼します！』

ふふつ、かいにロクショウか・・・、面白そつだね・・・。

Memory Disc2へ続く・・・

## Memory Disc1 新生モンヒ誕生！かいとロクショウ（後書き）

次回からは平和です。

フジーにメダロットという感じだと思います。

こんな小説でよければ次回も！

（ノシ

## Memory Disc2 強敵登場～やのゆめ童話～（記録版）

今回もメダロット2でお塗りのあのキャラも出てしゃあやー。

それではお楽しみくださいこー！

## Memory Disc2 強敵登場ーその名は竜崎ー

「…………ヒ言ひ訳で、今日から家で住むことになったんだけど。」

『よ、宜しく頼む』

・・・・やつぱダメか?

「おお……かい、お前もつこにメダロシトを始める気になつた  
か!」

父さんは問題無いけど……。

「…………やつ、よろしくね、ロクショウウヰヤん。」

「じ、じゅあ、オレたちとは出かけんから。」

「また、かいー。」

「な、なに?」

「彼のパーティだけじゃ組み換えができないだろ?これを持っていき  
なさい。」

やつは父さんは五千円をオレに渡した。

「あ、ありがとう、じゃ。」

やしてホンは急ぐよつて家を出た。

「やせつ馬の子せりつでなくあやな。」

「……ええ。」

## 公園

『じいしたのじいわるか、かいど。』

「うそ、いや……。」

『もしかして母上じいせメダロッテのじいじが嫌いなのか?』

「こや、やうじやないんだ、ただ母さんはメダロッテの話を全然しないからせ・・・。」

『やうじわるか・・・。』

「・・・なあ、ハベリこいひま。」

『う、うむ。』

オレたちは話題をかえ、ハベリくと向かつた。

「来たのはいいけど……。」

特に欲しいパーツとかないんだよな……。

「まあ、見るだけ見てみるか……。」

オレはしじまう棚に置いてあるパーツをながめていた。

「……なあロクシヨウ、これなんかどうだ？」

『……メガファント?』

なぜかロクシヨウの目が冷たくなった気がした。

「……どう思つ?」

『なんとなくそれは嫌なので「やるが……。』

「別に全部つけなくてもいいんだぜ?」

『……左腕意外取り換えられそうじゃねえ。』

「……わかった、そんなに嫌ならやめとくよ。」

……ロクシヨウはメガファントに嫌な思い出でもあるんだらつか?

特に買う物も無いのでオレたちは「ハンマー」を出でました。

すると聞き覚えのある声がした。

「かい———！」

「何だよイセキ、そんなに慌てて？」

「あんた研究所を襲つたメダロット達を追い返したでしょ、その噂を聞きつけたあるメダロッターに田をつけられたのー！」

「……それでそのメダロッターってのは？」

「竜崎 蓮次、通称恐竜使いの「REX」よ。」

「れ、REX…………て、誰だ？」

オレがそつ言いつトイセキはずつとけた。

「……あんた本当になんも知らないのね。」

「……」

「竜崎はこの辺じゃ名の知れたメダロッターよ。」

「それでもって竜崎のやつは三日後に対戦したいって言つていたわ。

「

「……あ、ああ。」

「三日後か、そうと決まれば特訓だな、行くぜ、ロクショウ！」

『「つむ。』

「待つんだ、君たち！」

すると突然誰かから声をかけられた。

「君たち竜崎と戦うのだろう？、だったら僕に特訓をつけさせてくれないかい？」

「・・・誰だあんた。」

「すまない、名乗るのが先だつたね、僕は大村 鱒次九郎、ジックと呼んでくれ。」

「・・・で、何でそのジックさんがオレ達に特訓をつけてくれるんだ。」

「竜崎とは少しね・・・、それに今の君たちでは竜崎には勝てない、それだけじゃダメかい？」

「・・・竜崎はそんなに強いのか？」

「ああ、少なくとも今の君たちでは敵わないだろうね。」

「・・・あんたに特訓をつけてもらえば勝てるってのか？」

「僕は力を与えるだけさ、勝てるかどうかは君たち次第だよ。」

「おもしれえ、だつたらうけてやるぜ、あんたの特訓を！」

「やつでなくひりや画面じゃない、早速始めよ!」

「おひー!」

「えい、みる、ひよひよと待ひなよ!」

「ついでオレヒジックさんの特訓が始まった。」

ジックさんの特訓はとても厳しいものだった、だけどオレたちは諦めずに最後までやりとげたんだ!

三日後

商店街

「・・・逃げずこむつてきたみたいだな!」

「・・・イセキ、竜崎って高校生だったのか?」

「言ひてなかつたつけ。」

「聞いてねえよ!」

「別にロボトルの強さに年齢が関係する訳じゃないんだからいいじ

や  
な  
い  
！」

「おこ、お喋りはやしまでにして、さつさと始めてくれないか?」

しばらくオレたちが話していると竜崎にそう言われた。

「お、おー。」

「この勝負、合意と見て宜しいですね？」

「おわ！何だこのオッサン！」

「ロボトル協会公認レフ・リーのマーティンだ、お前そんなこと  
も知らんのか？」

「わ、悪いかよ?」

「別に構わんさ、俺が興味あるのはお前の実力だ。」

「・・・始めてくれ、うるちさんー」

「それでは、ロボトルラー、ファイトお———。」

やつが出したメダロットは惑龍のようなメダロットだった。

「いけ、アタックティラノ！」

『グオオオツ！！』

アタックティラノはいきなりハンマーを降り下ろしてきた！

『くつ！』

ロクシヨウも何とか避けることはできたが・・・、あのハンマー凄い威力だ。

『グオアアアアア！！』

ブウンッ！

ブウンッ！

『くつ、当たつたらひとたまりもないな・・・。』

「ふん、ちょこまかと、ティラノ！、ブレスファイヤーだ！」

『グオツ！』

ブオオツ！

『ぐあつ！』

「頭部に16ダメージ」

ティラノの頭部から吹き出した炎にロクシヨウが直撃してしまった・  
・。

「大丈夫か、ロクシヨウ！」

『ああ、心配は要らぬ！』

少し見くびっていたかも知れないな・・・、ジックさんに聞いてい

たよりもずっと強い……。

「ふつ、少しは抵抗してくれよ、それともその武器は見せかけか?」

「くつ、オレたちを甘く見るなよ!、ロクショウ、チャンバラソードだ!」

『でええい!』

「迎え撃てティラノ!」

『グオツ!』

闇雲に突っ込んだって返り討ちにあつだけ、それぐらいわかつていたさ!

「ロクショウ、跳べ!」

『承知!』

「なに!?』

高く飛び上がるロクショウ、突然のことにティラノも反応できなかつたようだ。

『ぐりえ!』

ズバッ!

『グウ!・!・!?』

「右腕に20のダメージ

「よし、ロクシヨウ、畳み掛ける!、ピコペコハンマー!」

『「つかおおーー!』

「くつ、調子に乗るなよ、ガキが!ストライクヒット!」

『「グオアアアア!..』

ズドオオン!

『「ーー?』

「ロクシヨウ!?」

「左腕に40のダメージ、左腕パーティ、破損、脚部に10のダメージ

「ふ、バカが、むやみやたらにがむしゃらの行動を使うからだ!」

「くつ、しまった・・・、うかつだった・・・!」

そうだ、がむしゃらの行動を行つた後は大きく体制を崩してしまつ。  
・・。

完全にオレが勝負を急いだせいだ。

『「大丈夫だかいど、拙者にはまだ自慢のチャンバラソードが残つてゐる!』

そんなオレをロクシヨウは励ましてくれた。

・・・ そうだよな、後悔するよりも勝つための作戦を考えなければ。

「ありがとう、ロクシショウ、……オレに考えがあるんだ、乗つてくれるか？」

『無論！』

「今残っているパーティから導き出せる答えはこれしかない、アンテナで命中精度を上げて頭を一撃で破壊する……！」

『……承知した！』

辛うじて脚部は破壊されなかつた、これなら攻撃をかわしつつ索敵行動を行える！

「ロクシショウ、アンテナ！」

『おう！』

ブウン　ブウン……

「……何を狙つてゐる、……やれティラノーストライクヒットだ！」

『グオオオオ！』

ブォンッ！

『ふん！』

ブォンッ！

『はつー.』

「ちつ、ちよこまか逃げ回りやがつてー.」

『グオオオオオオツーー.』

ブォンシ！

「こまだ！チャンバラソードだー.」

『つおおおおー.』

「な、何！」

ズバアツ！！

ロクシコウの攻撃はティラノに命中した、だが・・・。

「脚部に55のダメージ、脚部パーティ、破損」

「ふつ、どうやら狙いがずれたようだなー、とどめだティラノーー.」

『まだだ、拙者たちの攻撃はまだ終わっていない！』

「何ー？」

『つおおおおおー.』

ズバアアアツーー！

『グオアアアアアツ！？』

「頭部に50ダメージ、頭部パーツ、破損、アタックティラノ機能停止」

「ばつ、バカな！？」

「リーダー機、機能停止！、そこまで！、勝者、獅童かい！」

「よつしゃーーーーー！」

『ふつ・・・・・』

「うしてオレたちは初のロボトルに勝利した。」

「終わったようだな。」

するとジックさんがやつてきた。

「ジック・・・・・」

「気は済んだか、竜崎。」

「えつ！？」

オレにはよく状況がよく理解できなかつた。

「二人とも知り合い・・・？」

「ああ、竜崎は僕の友人さ。」

「ええっ！？、じゃ、じゃあどうしてオレに特訓を…？」

「竜崎が君の噂を聞いてね、戦つてみたいなんて言い出すから……。  
」

「余計なことを…。」

「でも、いつもでもしなきゃ彼はお前に勝つことはできなかつた、それともお前は弱い者じめがしたかったのか？」

「……わかつたよ、俺が悪かつた。」

「これに懲りたら見境なく他人にロボトルをふつかけるのはやめてくれよ。」

「……ああ、そうするよ。」

すると竜崎・・・さんがオレの方に向き直つて話かけてきた。

「かい、お前の実力は想像していたよりも高かつた、正直驚いたよ、・・・それにしても気になることがある。」

「研究所襲撃の事ですか？」

オレは竜崎さんが気になることがあると言つたのでそう聞いた。

「ああ、一体誰が何の目的でやったのか・・・、メダロットたちだけの犯行なのか、それとも裏で誰かが糸をひいているのか・・・。」

「確かに気になるな・・・、一応僕の方から博士に調査してもいいつよつて伝えておこう。」

「ジックさんは博士と知り合になんですか？」

「ああ、博士には色々とお世話になつてゐるよ。」

「はあ・・・。」

「今日はもう帰つた方がいいんじゃないかい?、ロクシショウのメンテナンスもした方がいいだらうじ。」

「あ、じゃあそります。」

「・・・何かあたし会話に入つていけでない気がするんだけど。」

「気にすんなよ、早く帰ろ!ばば。」

「ひじて色々あつたけど今日は無事に過ぎて行つた・・・・。」

Memory Disc3に続く・・・。

## Memory Disc2 強敵登場！その名は竜崎！（後書き）

今回は一人ともメダロッチをつけていたのでゲームに近づけて見ました。

戦闘描写など上手く書けているかわりませんが、もっとこうした方がいいなど意見があれば言ってください。

では。

（ノシ

## Memory Discus 口述の技術 (温故) (2)

今日は平穏な話です。

ロボトルは控えめです。

では樂しそうください！

「……ああ、暇だな。」

『アハハハ』

昨日は色々あつた分、今日が余計に暇に感じた。

「出かけるかな……。」

暇だったのでとつあえず出かけることにした。

街中

何かをするわけでもなくオレは街をぶらぶら歩いていた。

すると……

「……ん？ あこつは確か……。」

『ヒカルどのだ……。』

しづらへ歩いてくるとヒカルつてやつを見かけた。

とつあえずオレは顔をかけることにした。

「おこ。」

「え、ああ、かいくん、それにロクショウ・・・？」

「「」なんと「」るでなにしてんだ？」

「いや、暇だつたから少し歩いてたんだ。」

なんだ、オレと回じか・・・。

「だつたら誰かとロボトルすればいいんじゃないか、おまえくらい有名なら相手なんて「」くらでもいるだろ。」

「はは・・・、実はそつもいかないんだ。」

「・・・？」

「少し場所をえて話そつ・・・。」

ヒカルがそう言つたのでオレ達は場所をえて話すこととした。

「・・・せうか、有名すぎるのも考え方だな。」

オレはヒカルから二三年前の事件の事などを聞いた。

「うん、あの事件以来一部の人を除けばオレにたいする反応が変わつてしまつた気がするから・・・。」

「・・・」

「セツシテゼビしてかいぐんせロクシマヒと。」

「ああ、実はな・・・。」

オレはこの前あつた事をヒカルに話した。

「やうか、そんなことがあつたのか・・・。」

「まあ、なんで研究所が襲われたのかはわからんないだけだな。」

「やう・・・、それにしても研究所を襲つたメダロットたちは何者なんだらうね?」

『あの狐王丸と書つやつ、ただの野良メダロットにしては強すがる。

』

「もしかしたら誰かの命令で動いていたのかも知れないね。」

『まあどんなやつでもオレだつたら勝ださどなー。』

しばらく話してるとヒカルのメダロットであるメタビーも話に加わってきた。

「いり、メタビーー。」

「ずいぶん元気がいいんだな、おまえの相棒は・・・。」

「ははは・・・。」

「オレも口クシ<sup>コウシ</sup>やとおまえたちみたいな関係になれるのかな・・・？」

「うん、きつとなれるか、オレたちみたいな感じではないだろ? つか  
ど。」

「ああ・・・。」

「・・・それにしてもかっこいいな風に話しができるなんて思つてなかつたな。」

「・・・えつ？」

その言葉に少し驚いたが理由は大体わかつたので話を続けて聞く事にした。

「最初見た時の印象はちょっと恐かったから。」

「ほほ、やっぱそうか、でもオレもイセキ以外のやつといんな風に話したのは久しぶりだ、楽しかったぜ。」

「それはよかつたよ、じやあまた今度。」

「ああ、またな。」

そう言つてオレはヒカルと別れた。

「・・・本当に久しぶりだぜ、あんなにしゃべったのも。」

『よかつたで、』  
『わな。』

「ああ。」

『んっー。』

「・・・ぬいど、『めんよ。』

歩いてくるときなり誰かにぶつかられた。

それにも不自然なぶつかり方だったな。

「うふ？、あ、サイフがねえーー？」

『もしゃせの野ー。』

「待ちやがれー。」

オレは急いでさつきの男を追いかけた。

『待ちやがれー。』の野郎ーー。』

「ん、げつ、追いかけて来やがった！」

『までーー。』

「まことに言われて待つやつがいるか！、・・・にしても足の早いガ  
キだぜ。」

「血漫じやねえが運動神経はいい方なんだよー。」

しばらく走つてこるとスリの田の前に人が立つていた。

「どけー。」

「・・・ふんつー。」

するとその人はスリを突然投げ飛ばした。

「うわあー。」

ドンッ！

「なつ、なんなんだ、てめえはーー？」

「僕か？、僕はセレクト隊隊長、竜崎正義だ。」

「せ、セレクト隊ーー？、あのロボロボ団と繋がつてやがった？」

「それは三年前の話だ、それにしても君はなにをしたんだ、あの少年に追いかけていたようだが？」

「うひ、や、それは・・・。」

「そいつオレのサイフスリやがったんだー。」

「やうか、なるほど・・・ならば捕まえなければいけないな。」

「ぐつ、クソおつ、いつなつたらロボトルだ！」

「僕とロボトルか、いいだろ？」「

「タンクソルジャー転送！」「

「こい！、バオリキシー転送！」「

「なんだ、あのメダロット！？」

オレはセレクト隊の人が出したまるで恐竜の化石のようなメダロットに驚いた。

「なんだあ、その『こい』だけの骨野郎はやる気あんのか？」「

『・・・・・』

「覚悟はいいか、ロボトルファイトだ！」

「ハチの巣にしちまえ、タンクソルジャー！」「

『了解！』

ズドドドッ！

タンクソルジャーの弾丸がバオリキシーに向かって飛んでいく。

「避ける、バオリキシー。」「

『・・・・・』

ドン、ドン、ドンッ！

バオリキシーはタンクソルジャーの弾丸をすべて回避した。

「す、少しばかるようだな！」

「終わらせり、バオリキシー、アンガテコントロールを潰せ。」

『・・・』

その瞬間バオリキシーはタンクソルジャーの田の前に瞬時に移動し左腕を降り下ろした。

グシャツ！

「頭部にフロダメージ、頭部パーティ破壊、タンクソルジャー機能停止

「う、うわあ、そんな！」

「すげえ、一撃で倒しちまった！」

「さあ、来てもらおうか。」「

「クソ、いつなつたら逃げるが勝ちだー！」

「あ、までよー！」

スリは逃げようとしたがその先には・・・

「逃がさないであります！」

「クソ、ならじつちこ・・・・!」

「通さないでありますー」

男はすでに囮まれていた。

「ジ」「苦勞様であります、隊長。」

「ああ。」

「・・・あの、オレのサイフ。」

「ああ、そうだつたね、おい！」

わ、わかつたよ！返しがいいんだろう！」

男はサイフを取り出しオレに向かって放り投げた。

「あ、よがた……」

「じゃあ僕はこれで。。。」「

「あの、待つてくれ！」

オレは気になつた事があつたので隊長さんを引き止めた。

「なんだい？」

「たしかあんた竜崎つて……。」

「…………、ああ、もしかして君も弟に？」

「弟つて竜崎蓮次の事か？』

「ああ、やっぱり君も弟にロボトルをいどまれたんだね、大丈夫だつたかい？」

「いや、別に勝てたし、ロボトルが終わってみれば案外いいやつだつたし。』

「驚いたな、蓮次に勝つなんて……、すげいんだな君は。』

「いや、そんな……、ロクショウがいてくれたからです。』

正義さんはすげいと言つてくれたがオレだけの力で勝つたんじやない、ロクショウがいてくれたからだ。

「そう言えどもあいつ、なんかセレクト隊がロボロボ団といどりとかつて……。』

「ああ……、三年前に魔の十日閏と書つ事件があつたのは知っているね？』

「はい。』

「その事件の主犯がセレクト隊の前の隊長でね……、それと同時にロボロボ団の首領でもあつたんだ。』

「はあ・・・。」

「それ以来セレクト隊は信用を失つてね・・・。」

「そりだつたんだ・・・、すいません変な事聞いちまつて。」

「いいんだ、事実は事実だからね、それに僕には自分の正義がある、僕にとつてはみんなが平和に暮らしていければ自分がどう思われても構わないんだ。」

オレが謝ると正義さんはそう言った。

・・・すごいな、この人、自分たちがどう思われていってもみんなの事を思えるなんて。

「正義さん、オレはみんなからセレクト隊が信用されていても、正義のことは信用します!、だってみんなのことを思える人が悪い人の訳がないから!」

「・・・ありがとう、君の名前は?」

「獅童かいです。」

「そりか、君のような少年達のためにも頑張らなければな・・・。」

「あ、もうこんな時間だ!、じゃあオレはこれで。」

『・・・優しい心を持った少年ですね。』

「ああ、彼のよつな子供の達のためにもオレたちが正しへおりねば  
な。」

『・・・ええ。』

かいの家

「ただいま。」

『ただいまもどった。』

「おかえりなさい、かい、ゴハンできてるわよ。」

「幽さん。」

「ロクシワウチヤんもおかえりなさい。」

『う、うむ。』

「ああ、かいはやくあがりなさい。」

『うふ。』

オレは幽さんと並んで家に上がり御飯をたべた。

そしてやる」とも無いのでもつねりとした。

お休みなさい……。

## ロクシニアウスィード

かこどのは寝てしまわれたが拙者は少し考え事をしたい気分だったのでもう少し起きていろ事にした。

『ひむ・・・・。』

「ねえ、ロクシニアウスィード、ちょっととこい？」

『・・・・?、かまわないで』

母上殿に声をかけてきてやつしたので拙者かまわなこと答えた。

「・・・ねえロクシニアウスィード、今かこどんな感じ?」

母上殿はかこどりの事を聞こしてた。

『特にこれと言つて変わった事はないで』

「やつ、あなたは?」

今度は拙者の事を聞かれたので拙者はいつ答えた。

『拙者も大丈夫でござる。』

「アハ・・・かいの事、よろしくね。」

『つむ、わかつた。』

「あなたも氣をつけてね。」

『ハ、ハム。』

かこどものじとをたのむか・・・、母上殿はかい殿のじとを本当に  
思つていらっしゃるのだな。

拙者もそろそろ休むとかなか・・・

『お休み・・・。』

「機能休止します、お休みなさい」

Memory Disc4 に続く・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5842y/>

---

メダロット +

2011年11月23日19時52分発行